

ダニエル書2章44節「到来する御国」

1A 神政イスラエル

1B 神と顔を合わせるモーセ

2B 民の間にある幕屋

2A 王国イスラエル

1B 羊飼いの心を持つ王

2B 人々を食いつぶす列王

3A 異邦人による支配

1B 諸国の支配

2B 人による支配

4A キリストの御国

1B 見捨てられる礎石

2B 踏み荒らされるエルサレム

3B 大きな山

本文

ダニエル書 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学び、今日は 2 章です。午後礼拝で 2 章全体を一節ずつ読みますが、今朝は 2 章 44 節に注目したいと思います。「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。」

私たちは前回、ネブカデネザルが夢を見たという話を聞きました。ダニエルと友人三人が夢を見て、啓示が与えられました。それをダニエルが王の前で話します。夢を語り、その解き明かしをします。その最後の部分が今、読んだところです。バビロンとその後に続く王たちの時代に、天の神が永遠の国を立たせます。それらの国々をことごとく砕いて、それで神の国を地上に打ち立てます。イエス様が弟子たちに、こうやって祈りなさいと言われた祈りであります。「御国が来ますように。みこころが天で行われているように地でも行われますように。(マタイ 6:10)」

今朝は、「政治」について話します。政治と言っても、今、マスコミで騒がれている内容ではなく、その元々の意味である「治める」ということについて見ていきたいと思います。私たちが、このようにして礼拝に集っているということは、それがすでに政治的行動です。それは、キリストこそが主であり、王であり、この方が私たちの頭であるということ認め、宣言し、心と思いをこの方に向けることです。しかし、私たちは生まれながらにして、そのように生きていませんでした。自分こそが主

であり、心の中では自分が王座を占めており、自分の人生は自分で治めるといっていました。その自分中心の生活から悔い改め、イエスを主としました。そして、キリスト中心の生活に変わる時に、私たちはいわば政治亡命したようなものです。パウロがコロサイ人への手紙で、このように言っています。「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:13)」

そして、私たちは、今の社会においてどのように生活しているでしょうか？日本国は、自由主義、民主主義の制度を持っています。世界には、社会主義、共産主義、イスラム教の支配、王国などいろいろあります。日本は立憲君主制の中にいます。天皇陛下がおりますが飽くまでも象徴であり、政治的権限はありません。政治の主権は国民にあり、私たちの選挙によって選ばれた代表者たちが政策を担当するという国です。

けれども、実際はそのようなことはあまり気にかけていませんね。今日は何を食べるか、何を着るか？どのグルメを楽しんで、どんな趣味をするか？神とかキリストとか言われても、「まあ、必要になった時にちょっと考えてみます。」という程度ではないでしょうか？これは、「私はいろいろなものがあるので、神とか、キリストとかいうのは、間に合っています。」という世界です。そのような価値観、哲学を持っていた町が黙示録にあります。ラオデキヤです。教会にさえ、そのような空気があって、「基本的に生活には満足しているので、イエス様は必要な時に呼び求めます。」という、イエス様がアクセサリーのようになっている状態です。そこでイエス様は、「3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」と言われました。そのラオデキヤという町は、「民が支配する」という意味なのです。自分たちが中心であり、自分たちで十分にやっつけられる、ということであり、自分より上に神も王もないという状態です。これが、実は私たちがもっと身近に感じる統治形態でしょう。自分のことだけ考えていればよい、自分より上にある権威や存在は基本的に考えなくてよい、という生活です。

けれども、それは先に言いましたように、アダムが罪を犯した時から始まりました。それまでは、神の命につながることによって生きるという、神の支配があったのですが、アダムが罪を犯してからは、自分自身で善悪を判断して、自分自身で生きていくという人間の支配になりました。その背後に悪魔が支配しているのですが、本人たちは自分自身でやっているという、人間の国です。そこで、主は何とかしてご自分の国を人々の間にもたらずべく、歴史を通じて人々に関わります。

1A 神政イスラエル

主は、アブラハムを選ばれ、彼をカナンのに導き、そこでアブラハムは主の名によって祈るようになります。祭壇を造りました。そして彼の子孫、ヤコブの家族がエジプトに下ります。そこで彼らは増えました。成年男子で約六十万にまでなりました。女子供合わせたら、おそらく二・三百万に

なっていたことでしょう。そして、主はエジプトから彼らを連れ出し、荒野において昼は雲、夜は火によってご自分がおられることを示されました。

1B 神と顔を合わせるモーセ

こんな沢山の人が、どのように国民としてまとめられていたのでしょうか。その政治はどうなっていたのでしょうか？モーセに対して、主の天幕を立てるように命じられます。そこに祭司が仕えて、聖なる所、聖所に入って、主がそこに現れてくださるようにしてくださいました。モーセは、主に会見する天幕が別途にあり、そこで顔と顔を合わせて主と語ったとあります。このようにして、モーセが主と直接交わっていたので、主ご自身が王となり、民を支配しておられました。それはまさに、教会と同じです。キリストが頭であられ、そして一人一人がキリストに結ばれるという政治です。これは、神政政治とも呼ばれるでしょう。神が直接、人々を導き、治めておられるのです。

2B 民の間にある幕屋

イスラエルの民は、荒野において宿営していた時、幕屋がその中心にありました。雲の柱が立ち、夜は火の柱が立っており、おそらく朝起きたら、正面には幕屋が見えていたことでしょう。自分たちの生活は、主がご臨在している中で成り立っていたことを生々しく感じ取っていたことでしょう。

2A 王国イスラエル

けれども、その統治をイスラエル人自身が嫌がりました。士師サムエルが預言者として、イスラエルの民を導いていた時に、彼らは、「どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。(1サムエル 8:6)」と願ったのです。他の国々には王がおり、その力ある軍事力と、また富を有していました。イスラエルの民は、そうした統治機構がなく、ただ神を信じていなさいという、神の言葉を伝え、民のための祈る預言者しかいなかったのです。しかし、神に支配されることにこそ、自由があります。天地万物を造られた神の支配を受ければ、他の何物にも従属する必要がありません、その人は自由です。しかし彼らは、自分自身で神を王としてあがめるのではなく、人間の王に頼りたいと思ったのです。サムエルは、警告しました。王の権利というのは、あなたの息子を王のために与え兵士となり、娘を取り王のために働く女たちとなり、自分の所有地や財産を取って自分のものとしていき、奴隷にしたり、また重税を課したりする、と言いました。しかし、彼らは聞きませんでした。隣の家の芝は蒼かったのです。それで主は、彼らの望むとおりに王を与えました。サウルです。主はサムエルによって、サウルが自分自身により頼むこと、その命令を守ることを教えられましたが、彼は聞き入れませんでした。

1B 羊飼いの心を持つ王

しかし、主はサウルを退けて、ダビデを選んでくださいました。サウルは人々によって選ばれた王であったのに対して、ダビデは神に選ばれました。彼は神を愛し、神への礼拝を最も大きな喜びとしていました。そのため、彼は祭司にいつも付いてもらい、御心を伺いました。律法を口ずさんで

いました。神の箱を自分の町、エルサレムに持ってきました。そして預言者の言うことを聞いていました。それゆえ、イスラエルの国を自分の国だと思わず、神の国であり、その民は神の民であり、自分は神に立てられた王であることを知りました。ですから、人間の王が立てられたのですが、彼自身が神を王として礼拝していたので、民もその恩恵に預かることができました。彼は、少年の時に羊飼いでしたが、ちょうど羊飼いが羊を養うように、民を養う王でありました。「詩篇 78:70-71 主はまた、しもベダビデを選び、羊のおりから彼を召し、乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て、御民ヤコブとご自分のものであるイスラエルを牧するようになされた。」

2B 人々を食いつぶす列王

しかし、君主制においてそんな良い状態は長く続きません。ダビデの息子ソロモンの時に全盛を極めましたが、彼の死後、王国は二つに分裂しました。そして、次第に彼らは羊である民を養うのではなく、むしろ羊を自分のために屠って、食べてしまうようなこと、つまり民を他の国々の王と同じように横暴に取り扱うようになりました。人間には罪があります。アダムから受け継いだ罪があります。ゆえに、人に期待をかけても必ず腐敗するのです。そして、北イスラエルは紀元前 722 年にアッシリヤに捕え移され、586 年に南ユダがバビロンに捕え移されました。

3A 異邦人による支配

1B 諸国の支配

このようにして、神のイスラエルの選び、その選びにある神の国の回復が行なわれようとしていたのに、イスラエルが神を王としなかったために、異邦人の支配の中に入りました。ですから次の統治、政治は、神を知らない者たち、異教徒による支配であります。その始まりが、バビロンです。そしてバビロンの王ネブカデネザルが夢を見て、その後続くイスラエルの民を支配する異邦人の帝国が次から次へと変わる姿を神は彼に見せておられました。ある意味で、私たちキリスト者はこの統治の中に生きています。欧米は、キリスト教国と言われながら、実際はそうになっていないという葛藤があります。ちょうど君主制のイスラエルのような感じでしょう。けれども、非西洋諸国、つまり世界の多くの国は、キリストを知らない人々によって支配されており、その中にキリスト者が生きています。

2B 人による支配

それは人の姿をしている像でした。金の頭、銀の胸と両腕、腹とももが青銅、脚が鉄、そして足と足の指が鉄と粘土です。それぞれ、バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ、そしてローマの後の世界です。そして主がこれを、「人の像」として見せられたことが大事です。天地の神を神としない、神を知らない者たちが支配している人間の世界です。

人間が神を退けると、どのようなことが起こるか人間はいつまでも教訓を学んでいません。その典型は、共産主義です。父祖マルクスは、ユダヤ人であり、キリスト教に改宗した両親の下に育て

られました。彼自身、十代の時はキリスト者として生きました。しかし、神を捨て、キリストを捨てました。そして神なしで、神の国の理想郷を成し遂げようとする人間の世界を造ろうとしました。階級闘争によって、革命によってそれができると教えました。その結果、どれだけの人が死に、恐怖の中で怯え、文化が破壊されたでしょうか。そして、人間至上主義、ヒューマニズムが支配的になっています。平等、人権、自由などという価値観は、神あってこそ尊いものです。神の与えられる賜物です。しかし、神を退けてこれらのものを求める時に、その価値観は一気に不寛容に変わり、全体主義へと向かいます。「私たちの気持ちを傷つけた」として、学校や先生を訴えるモンスター・ペアレントなど殺伐とした空気が、今、日本の社会に流れています。

その夢の内容に戻りますが、ローマ以後、その状態は鉄と粘土になると書かれています。ローマ帝国は東西に分裂、その影響は西洋の歴史の中でずっと続きました。西ローマは、欧州の中でずっと「ローマ帝国」とか、「カイザル」という名前が使われおり、東ローマはロシアにおいて、ツァーという皇帝の名前はまさにカイザルであり、こちらも「第三のローマ」とも呼ばれる大きな軸となっています。そして今、欧州では欧州連合という形でつながり、またロシアもロシアの覇権が広がっています。そして、世界は西側勢力で一つにされています。日本も西側の陣営に入っています。グローバル化がそれに当たります。ですから、今こそが鉄と粘土に混じり合った時代です。

4A キリストの御国

しかし、このように人間が支配する状態がある中で、夢の中では「一つの石が人手によらずに切り出され」ました(2:34)。そして石が、その足と足の指の部分に当たります。そして人の像は全身、粉々に砕かれます。その石が大きな山となります。これこそ、私たちの主、イエス・キリストです。神は、キリストをもって世界をご自分の国へと完全に引き戻されるのです。預言者イザヤは、この石を次のように預言しました。「28:16 だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。」シオン、エルサレムに主は、私たちのより頼むことのできる石を据えてくださる、建物の礎石になる石を置いてくださいます。この方に信頼すれば、失望することはありません。

1B 見捨てられる礎石

イエス様こそが、神の国をもたらしてくださる方です。ですから、この方にこそ救いがあります。福音書の主のお姿を追うことは、ゆえにとても大切です。この方は、三十歳の頃から公に活動をされました。そして、逆説的な事が起こりました。ユダヤ人を回復させて、神の国を立たせるはずの方を、彼ら自身が十字架に付けてしまったのです。主は、十字架に付けることを推し進めた宗教指導者に対して、こう言われました。「マタイ 21:42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』」彼らこそが、神の家を

建てる者たちでしたが、その礎石になる方をかえって捨ててしまったのです。イエス様は、この見捨てられた石とされました。十字架につけられた者となりました。しかし、そこで私たちの罪を負われ、葬られ、そして甦られました。キリストは、彼らには捨てられた方であるが、私たちを救う神の力で、このキリストを私たちは宣べ伝えています。

2B 踏み荒らされるエルサレム

イエス様は、十字架に付けられる前に、オリーブ山において世界がどのようになるのかを預言されました。エルサレムがローマによって包囲されることを預言されました。そして、こう言われました。「ルカ 21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」紀元 70 年に、エルサレムはローマによって破壊されました。それでユダヤ人は、世界に散っていきました。ローマから、ビザンチン朝に変わり、それからイスラム勢力がここを支配しました。イスラムから十字軍が来て、エルサレムを占領。そして再びイスラム勢力が奪還します。そしてエジプト発のイスラムであるマムルーク朝が支配、そしてトルコ初のイスラム勢力であるオスマン朝が支配します。そして近代に入ります。第一次世界大戦において、英国がオスマン・トルコと戦い、戦後、国際連盟からの英国委任統治が始まります。そして、その時期に第二次世界大戦が勃発しました。

戦後、国際連合においてユダヤ人の主権の国が承認されました。1948 年 5 月 14 日に、その決議案に基づき独立宣言を出しました。そしてすぐに独立戦争が始まります。東エルサレムはヨルダンの手に落ちました。しかし 1967 年に六日戦争が勃発、その時にイスラエルはヨルダンからエルサレムを奪還したのです。エルサレムが、ローマによって滅ぼされてから、いや、バビロンによって滅ぼされ以来の、イスラエルの主権下に入りました！しかし、いくつか問題があります。一つは、ソロモンの建てた神殿の丘には、イスラム教の岩のドームがありますが、その敷地を六日戦争後、すぐにイスラム当局の管轄に任せました。そして、イスラエルは東エルサレムも併合したものの、国際社会がそこをイスラエルのものとして認知していません。そして何よりも、イスラエルは民主主義国です。神またキリストによる支配とは程遠いものです。

3B 大きな山

しかし、イスラエルの国が建てられていること、エルサレムがイスラエルの主権の中に入っていることは、イエス様が言われたように、異邦人の時が終わる時が近づいていることを表しています。主が再び戻って来られて、御国が来ますようにという私たちキリスト者の祈りをかなえてくださる時が近づいているということです。その時には、平和と正義が海の水のように満ちることが預言されています。その素晴らしい幻の一部を読んでみましょう。「イザヤ 11:1-9 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、そ

の目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」主を知っていることが満ちあふれるので、正義と平和がこのように実現します。

そこで私たちは問わなければいけません。私たちは今、神を知っているでしょうか？イエスを主として受け入れ、この方の支配の中に入っているでしょうか？キリスト、メシヤを待ち望んでいたはずのユダヤ人がこの方を初め退けてしまいました。「ルカ 19:14 しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません。』と言った。」平和や正義を求めているも、平和の君、義なる方を自分の王としないで、どうして正義と平和が自分のところに来るでしょうか？自分の人生の主としないで生きているならば、他の国々がこの石によって粉々に碎かれるように、自分も碎かれてしまいます。「マタイ 21:44 また、この石の上に落ちる者は、粉々に碎かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」その前に、自分自身の魂を主の憐れみの中で碎かれてみましょう。ダビデが罪を犯した後にこのように言いました。「詩篇 51:17 神へのいけにえは、碎かれたたましい。碎かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」